

コソヴォにおけるアルバニア語の状況と その発話に見られる特質について

井 浦 伊知郎

0.

筆者は1999年8月の後半、ユーゴスラヴィア・セルビア共和国のコソヴォ（アルバニア語『コソヴァKosova』。セルビア語『コソヴォ・メトヒヤ Kosovo i Metohija』）で日本人NGOの支援活動に同行した（詳細は<http://www.ipc.hiroshima-ac.jp/~iiura/vizita99.htm>）。コソヴォは住民の約9割がアルバニア人であり、そのアルバニア語はアルバニア共和国北部、モンテネグロと共に、北部アルバニア方言グループの一を成している。その音韻・形態・統語面の特徴については鼻音の存在や/r/~/n/の「ロタシズム」、（標準語では消滅している）不定詞の用法、分詞語尾の消失など、既に多くの研究が行われている。本稿では、コソヴォ南西部のプリズレン Prizren市に住むアルバニア人の言語状況を中心に、音韻や語形態とは異なるレベルで興味深い傾向をいくつか紹介する。

1. コソヴォのアルバニア語

標準アルバニア語Mirëdita!「こんにちは」（英lit. Good Day）がコソヴォのアルバニア語でDitën e mirë!となることはコソヴォを訪ねた人達の間でよく知られている。この他にも微妙な挨拶の違いがあり、例えばMirëmëngjes!「おはよう」（Good Morning）はアルバニアでも用いられるが、コソヴォではこれに続けてU çove? Fjete? Pushove?（You got up? You slept? You rested?）とたたみかけるように尋ねることが多い。

また標準語で来客に対する「ようこそ」の意で用いられるMirëseerdhët（You came well）が、コソヴォでは帰宅時の「おかえり」の意味でも用いられることがあり、「お目にかかれて嬉しい」にあたるMirësegjeta（I saw [you] well）がそのまま「ただいま」として発話される。また食事時の「召し上がれ」にあたるBëftë mirë（Be made well）はアルバニアの場合つねに用いられるわけではないのに対し、コソヴォではあたかも日本語の「いただきます」のように頻繁に用いられ、相手も「ありがとうFalemnderit」で返答するのが常となっている。

更にコソヴォのアルバニア語には日本語の「お疲れ様」にあたるねぎらいの表現が頻出する。道で出会った人にも、仕事中和見えればU lodhe?と話しかける。これは直訳すれば

「疲れましたか？」で、標準アルバニア語でも言わないことはないが、コソヴォの方が使用頻度は高い。言われた側も、状況に応じ肯定（“Po”）または感謝（“Faleminderit”）する。これに関連して書くと、「～氏」「～殿」にあたる呼称 *zotni* (*zotëri* とも) がアルバニア側ではすべて *shok* (英“comrade”や独“Genosse”にあたる語。『～同志』) に取って代わられている。

アルバニア語の動詞の法表現には、完了形を基にして作る「感嘆法 (admirative)」がある (例; *Ka qënë student*. 『彼は学生だった』 > *Qënka student!* 『彼は何という [すごい] 学生か』) が、コソヴォ・アルバニア人のやりとりを聞くと、さほど驚いているようには見えない場面でもこの感嘆法が抵抗なく用いられていることに気付く。

以上の例を見る限り、コソヴォの会話表現の方が「丁寧さ」や「敬意の率直な表出」といった点においてアルバニアのそれを上回っている様に見える。

次に、同じアルバニア語でもアルバニアとコソヴォで意味がずれてしまうものを、筆者が現地で採集したものからあげておこう；

(『ア』はアルバニアの標準アルバニア語、『コ』はコソヴォのアルバニア語)

「すいか」 (ア) *shalqi*

(コ) *bostan* (プリズレンの使用例。標準語ではウリ科の果実全般を指す語)

「洗車場」 (ア) *lavazh* (イタリア語 *lavaggio* と同起源)

(コ) *autolarje* (*auto* + *larje* < *laj* 『洗う』)

「自動車」 (ア) *automakinë* (単に *makinë* とも) (コ) *automobile*

「アルバニア語ができる」 (ア) *flas shqip* (I speak Albanian)

(コ) *di shqip* (I know Albanian)

「(建物から) 出かけよう」 (ア) *Ikim!* / *Ecim!* (I get out) / *Dalim!* (I exit)

(コ) *Shkoj!* (I go)

「首相」 (ア) *kryeministër* (*krye* 『頭』 + *ministër* 『閣僚』)

(コ) *kryetar* (標準語では広く『議長』全般を指す語)

次は、アルバニア語では余り使われない語彙がコソヴォではむしろよく使われる例；

「何」 (ア) *çfarë* (コ) *qysh*

「それから」 (ア) *pastaj* (コ) *mandej*

「トイレ」 (ア) *banjë* (コ) *nevojto* (原義『必要とされる所』。コソヴォで *banjë* は『風呂』のみを指す)

最後の *nevojto* は「用足し」「お手洗い」に相当する婉曲な語だが、アルバニアでは通じないことがある。また *A ke nevojë?* (Do you have necessity?) と聞けば「手を洗いますか？」という遠回しな質問になる。

この他にも、te na (by us) 「我々のところでは」やu bë (be made) 「よろしい」など、コソヴォには（構成する語そのものは標準語にもあるが）標準語には見られない慣用表現がある。

2. コソヴォのセルビア語

コソヴォ・アルバニア人はこれまでセルビア人による政治的支配を受けてきた。そのため、学校や社会生活の場でもセルビア語の習得を余儀なくされており、ほとんどのアルバニア人がセルビア語を解する。ここ十年近くの情勢のため、このことを表立って評価するアルバニア人は余りいない。しかし例えば隣国マケドニア（総人口の22.9%にあたる約45万人がアルバニア人）やモンテネグロ、ブルガリアを往来することも珍しくないコソヴォの住民にとって、有力なスラヴ語の知識はそれなりに有用性を持つと考えられる。筆者はマケドニアの首都スコピエで、同行したコソヴォ・アルバニア人の運転手がセルビア語だけで用を足すのを目撃している。

3. プリズレンのトルコ語

プリズレンの言語状況における最大の特徴は、アルバニア語とトルコ語の2言語が日常生活で併用されていることである。正確な内訳は不明だが、市民の5～6割がトルコ語を解するという説もある。

バルカン半島の歴史的背景から、アルバニア語にトルコ語の要素が多く含まれていることは言うまでもないが、トルコ語そのものを使用するアルバニア人が住む地域はおそらく他にない。プリズレンではアルバニア語かトルコ語かのどちらかで学校教育を受けることができる。このため初等教育を終えるまでトルコ語しか話せない子どももいる。トルコのテレビ番組も視聴されており、市内では通りの名称表示も「アルバニア語－セルビア語－トルコ語」の3言語で併記されている（他の地域は『アルバニア語－セルビア語』）。

プリズレンのアルバニア語－トルコ語の「2言語併用bilingualism（アルバニア語ではbilinguizëm）」について、社会言語学の観点から考察を加えて本稿の終わりとする。

(1)コソヴォ全体では、先ずセルビア語とアルバニア語の「2言語併用」があり、公の場（官庁、企業、学校、軍隊）ではセルビア語がアルバニア語に優先する（してきた）。セルビア語を日常言語としないアルバニア人に対する待遇差別があったことから、それは明らかである。「セルビア語>アルバニア語」の関係には、社会的機能に応じてそれぞれの言語が使い分けられている（diglossia アルバニア語dygjuhësi）と言える。

(2)一方、プリズレンのアルバニア語とトルコ語の間にそうした「高位－低位」「公－私」のはっきりした使い分けは認められない。言語社会の構成員が殆どアルバニア民族なのでアルバニア語が優位にある様にも見えるが、プリズレンという一地域に限定すれば、トルコ語の言語能力がアルバニア語のそれより社会的に有利に働くことさえある（例えばトル

コとの貿易業を営むコソヴォ・アルバニア人)。

だからといってトルコ語が優位にあるわけではない。家族を基準にして分類すると、(A)トルコ語とアルバニア語をほぼ同程度話せる一家、(B)アルバニア語も使えなくはないがトルコ語の方を積極的に用いる一家、(C)トルコ語を殆ど用いない一家があるのだが、これらの相互関係は社会的に完全に対等であり、トルコ語話者とアルバニア語話者の間に日常生活の断絶は殆ど感じられない。つまり「家庭内母語」の違いで2種類のコミュニティを形成して分離している、という雰囲気ではない。必要ならアルバニア語で話せばいいのであって、アルバニア民族としての堅固な「同胞」意識が背景にあるのではないかと思われる。「アルバニア語－トルコ語」の関係はdiglossiaとは言えないだろう。

(3)残る問題は、アルバニア語及びトルコ語とセルビア語との関係、特にプリズレンのトルコ語とセルビア語との関係がどのようなものだったか?という点だが、セルビア語による言語生活の場が、その母語話者も含めて現地から駆逐されてしまった今では、観察のしようがない。

参考文献

- Akademia e Shkencave të Republikës së Shqipërisë (1999). *Kosova në vështrim enciklopedik*. Tiranë: Toena
- Bajçinca, Isa (1998). Rreth disa problemeve të shqipes letrare të kohës sonë në Kosovë. *Gjuha Jonë* 18, 25–29
- Fischer *Weltalmanach 2000*. Frankfurt am Main: Fischer (1999)
- Gjinari, Jorgji (1989). *Dialektet e gjuhës shqipe*. Tiranë
- Hetzer, Armin/ Finger, Zuzana (1991). *Lehrbuch der vereinheitlichten albanischen Schriftsprache*. Hamburg: Helmut Buske Verlag
- Hysa, Enver (1994). Les elements turcs dans la structure du mot en albanais. *Studia Albanica* 31, 87–91
- Shkurtaç, Gjovalin (1996). *Sociolinguistika*. Tiranë
- 現代言語学辞典. 東京: 成美堂(1988)